
仮面ライダーカブト 其の弐

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーカブト 其の弐

【Nコード】

N0484E

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

前作、仮面ライダーカブト の続編、であります！by・ケロ
軍曹

（前書き）

一寸エツチ。R15にした方が良いかな？と思つそんな第2弾。
「文香ー！by・カブト」

都内にある有名な私立高校に通う相楽^{さくら} 雅弘。彼が登校している
と、背後から何者かに目隠しをされた。

「だ〜れだ？」

と言うのは先日、カブトに変身してワームを殲滅した主人公の板
橋^{いたばし} 聡美である。

「聡美だろ？」

その問いに聡美は「正解」と手を退かして横に着く。

雅弘はそんな彼女を無視して歩き出した。

「ちよつ、無視しないでよもう！」

聡美はふくれっ面になって後を追った。

「何だよ？付いて来んなよ」

「あのね、私も同じ学校なんですけど」

「知ってるよ。だけどお前は来んな」

「何だよ？」

「だって、お前を見てると文香を思い出すんだもん」

文香と言うのは、この前、廃墟でワームに殺された、雅弘の彼女
で、聡美の双子の妹である。

「あんた、未だ引きずってんの？そろそろ新しいの見付けたらどう
なのよ。何なら、私になってあげても良いけど？」

「それは却下。お前と文香じゃ性格が全然違い過ぎる」

「そりゃそうよ。双子でも別人なんだから」

「そうだな。てか、そう言うお前は居ねえのか？」

「うーん・・・居ないわねえ」

「何だ、居ねえのか。よし、じゃあもし、好きな人出来たら協力し
てやるから教えてくれよな？」

「チミの協力なんて私には必要ありませんーん」

と少し頭に来そうな口調で言う聡美。

「お前な。折角、人が好意で言っただけなのにそれを無駄にする気か？」

聡美はその問いを無視して背後を警戒する。

「相楽、付けられてるわ」

「え？」

雅弘は後ろを振り返るが、誰も居ない。

「何だよ。誰も居ねえじゃん」

とその時、雅弘が宙に舞った。

「相楽！」

聡美は慌てて跳び、雅弘を空中で抱き抱えて着地した。

それと同時に、白いサナギ体が聡美の前に姿を現した。

眉を顰める聡美。

ホワイトワームは喉を鳴らして構えた。

「相楽、離れてて」

と雅弘を放して背後へ退かず。

聡美はやれやれと言う表情で溜め息を吐いて言った。

「戦士に休みは無しか」

聡美はゼクターを召喚して手中に収めた。

「変身」

とバックルにセットしようとするが、ホワイトワームがそれをさせまいとクロックアップして近付き、聡美を横へ吹っ飛ばした。

「キャッ！」

「キャッ！」

塀にぶつかり、気絶して地面に横たわる聡美。

「聡美！」

雅弘がそう言って駆け寄ろうとすると、ホワイトワームが目の前に立ちはだかり攻撃して来た。

「うわっ！」

「うわっ！」

間一髪、雅弘はホワイトワームの攻撃を避けた。しかし、直ぐに次の攻撃が迫り、今度は避ける間も無く喰らって吹っ飛んだ。

「うわああああ！」と悲鳴を上げて宙を舞う雅弘。

ホワイトワームはクロックアップし、雅弘に数回体当たりをしてクロックオーバー。

「うわっ！」

地面に体を叩き付けられる雅弘。

「聡美、早く何とかしろ！」

雅弘はそう言つて聡美を見るが、聡美は未だに気絶をしたままである。

（やべえ、俺死んだわ）

そう思つた時、どこからともなく「Cast off」と音声が届く。飛散したアーマーの一部が飛んで来てホワイトワームを吹っ飛ばした。

雅弘は驚き、アーマーが飛んで来た方向を見た。その先には、とても大きな青いクワガタが二本足で立っていた。ガタツクである。

クワガタ？ と疑問符を浮かべる雅弘。

それと同時に「Change stage beetle」とガタツクホーンが起き上がり、ガタツクの目、コンパウンドアイが発光する。

ホワイトワームは立ち上がり、「シャー」と喉を鳴らしてガタツクに襲い掛かるが、ひらりとかわされて反撃を受け蹠踉めく。

ガタツクはその隙に腰のベルトに装着したガタツクゼクターのフルスロットルを三回押し、ゼクターホーンを展開し、パワーをチャージして元に戻す。

「Rider kick」

と音声が鳴ると同時にガタツクはホワイトワームに回し蹴りを放す。・とうとしたが、背後から何者かに攻撃され、吹っ飛んだ。

「人の獲物に手出さないでくれる？ 蜂さん」

そう言つてザビーを見るのはカブトである。

カブト・・・ とガタツク。

「おい、どう言つつもりだ？」

ザビーは立ち上がりそう訊ねた。

そこへ、ホワイトワームがクロックアップで突っ込んで来る。

「はっ！」

カブトは頃合を見計らい、カブトクナイガンの銃身を握って刃をホワイトワームに突き刺した。

その瞬間、ホワイトワームは爆裂霧散した。

「どう言うつもりって、獲物を捕られるのを防いだだけよ」

じゃあ　とカブトは言って雅弘の方へ歩いて行く。

「待て！」

ガタツクに引き留められ、カブトは振り向いた。その瞬間、ガタツクが跳び蹴りを放って来た。

カブトは吹っ飛ばされ、地面を跳ねて転がった。

「キャストオフ」

カブトを素早く立ち上がってゼクターホーンを展開した。

「Cast off」

アーマーが吹き飛び、カブトホーンが起き上がる。

「Change beetle」

と音声が届き、ライダーフォームへ移行完了。

カブトは三つのフルスロットルを順番に押し、ゼクターホーンを反対側へ倒した。

「ライダー・・・キック」

とゼクターホーンを元に戻し、ガタツクに駆けて跳び蹴りを放つ。
「うわっ！」

必殺技を喰らったガタツクは吹っ飛び、地面を転がって変身が解けた。

「ベルトは没収よ」

カブトはそう言っていると、ガタツクの資格者に近付いてベルトを奪取した。

「おい、返せ！」と資格者。

「五月蠅いわね。撃ち殺すわよ？」

とカブトクナイガンの銃口を資格者に向けるカブト。

資格者は息を飲んだ。

「なんてね」

カブトはクナイガンを仕舞い、雅弘の下に移動した。

「行くわよ、相楽」

言ってカブトは雅弘と去っていった。

人気の無い通りに、一台のワゴン車は在った。

そのワゴン車に、黒いスーツを身に纏った一人の男が、今にも倒れそうな足取りで近付いて来て、ドアを開けた。

すると中に乗っていた女性が驚いた顔で訊ねた。

「加賀美くん、どうしたの!？」

「べ、ベルトをつ、ガタツクのベルトを盗られました!」

「何ですって!？」

「加賀美、誰に盗られた?」

そう訊ねたのは40代くらいの男性だ。

「カブトです!」

加賀美と呼ばれる男の言葉に、二人は眉を顰めた。

「岬、シャドウの矢車に連絡だ」

「解りました。直ぐに」

と女性は携帯を取り出して番号を入力した。

「矢車くん? 岬だけど、一つ頼みたい事があるの」

電話の向こうで、矢車は答える。

「頼み?」

「ガタツクのライダーベルトがカブトに盗られ・・・」

そこまで言い掛けた所で、矢車が掻き消す様に言った。

「悪いが無理だ。俺も、カブトにザビーゼクターを奪われてしまった」

「えっ・・・」

「どうした、岬?」

「田所さん、矢車くんもライダーブレスを奪われたそうです」
「何？岬、ちよつと代われ」

岬と言う女性は田所と言う男性に電話を渡した。

「田所だ。カブトに奪われたと言うのは本当なのか？」
「本当です。あれは確かにカブトでした。けど・・・」

「けど、何だ？」

「ライダーフォームの色が違ったんです」

「色？どんな色だ」

「黒です」

「なっ、黒だと！？」

「知ってるんですか？」

「本部から聴いた事がある。カブトのベルトは二つある、と。しかも一つは何者かに盗まれたそうだ」

「ではもう一つは？」

「正式な資格者の下に回された。名は板橋 聡美。住所はすまんが調べてくれ。こっちでは判らない。兎に角、その人と会って何とかしろ。じゃあな」

そう言って田所は電話を切った。

洋食店ビストロ・ラ・サルに、聡美は来ていた。

「何にするんだ？」

とアルバイト店員、くさかへ日下部 ひよりは言った。

「鯖の味噌煮お願い」

「・・・」

ひよりは無言で聡美を見詰める。

「何よ？」

「そんなの無い」

「あるでしょ？私の鼻は誤魔化せないわ。きつと、まかないで作っ

た物ね」

聡美が言つと、厨房から店長の竹宮たけみや 弓子ゆまこが顔を出して言った。

「ひよりちゃん、出してあげなよ」

ひよりは渋々と厨房に入つて鯖の味噌煮を作り、聡美の前に置いた。

聡美は無言で箸を取り、鯖の味噌煮を食べる。

「美味い」

それだけ言つて黙々と食べ続ける聡美。

そこへ、新たな客がやつて来る。

「ひより、いつものを頼む」

客はそう言つと席に着いた。

「悪い、天道。鯖はあれで最後なんだ」

ひよりはそう言つて、聡美が美味しそうに、と言つか本当に美味しく食べている聡美の鯖を指差した。

天道と言つ客はそれを見て肩を竦めた。

「あげないわよ」

聡美は天道に向かつてそう言つた。

「仕方がない。松輪サバの丸特に・・・」

天道がそう言い掛けた所で聡美が掻き消す様に言つた。

「松輪サバの丸特は全部買い占めたわ」

「何？」

「ごちそうさま」

聡美はそう言つと、お金を置いて出ていった。

「待て！」

天道が立ち上がつて後を追つて外に出て捕まえる。

「何よ？」

「その鯖、一匹で良いから譲ってくれ」

「食べたいの？」

「ああ」

「来て」

言って聡美が歩き出すと、その後ろを天道が付いて歩き出す。

家に着くと、門の前にスーツを身に纏った男が居た。

誰？ と聡美は訊ねる。

「この家の者か？」

「そうよ。何か用？」

男は聡美の後ろに居た天道を見ると耳打ちで「二人切りで話したい」と言う。

「解った」

一寸待つてて 天道に言つと、聡美は男と共に家の中へ入った。
「で、話して何？」

「単刀直入に言う。板橋 聡美と言つのは君か？」

「そうだけど・・・あんた、誰？」

「俺はシャドウの矢車^{やぐるま} 想だ」

「ZECTの人？」

「ああ。君に頼みがある。ザビーゼクターを取り返して欲しいんだ」
「どうして？」

「盗られたんだ。もう一人のカブトに」

その言葉に聡美は眉を顰める。

「悪いけど断るわ」

聡美はそう言つと矢車を追い返し、入れ替わりに天道を家に入れ、台所に案内した。

そこには丸特と書かれた大量の発泡スチロールが置いてある。

聡美はその内の一つを開け、鯖を一匹取り出してビニール袋に詰め、天道に渡した。

その時、玄関が開かれ、何者かが入って来た。

聡美は誰かと思い、玄関へと向かった。そこには、自分と同じ姿の少女が居た。

「誰？」

「あんたこそ誰よ？此処は私の家よ」

その言葉に聡美はカブトゼクターを召喚する。

「外に出ようか？」

そう言うのと、玄関に立つ少女は外に出て行つた。

聡美はそれに続き外へ出て少女と向き合った。

「あなた、ワームね」

聡美の言葉に少女はニヤリと笑う。

「あなたは此処で死んで私の中で生きるのよ」

「生憎、私はワームになる気は更々無いわ。此処であんたを潰して
終わりよ」

聡美はそう言うのとゼクターをベルトに填めてカブトに変身。少女
に襲い掛かった。

少女はひらりと身をかわし、黒いカブトゼクター召喚した。

「成る程。あんたがもう一人のカブトって訳ね」

「カブトは私一人で良い」

言つて少女はゼクターをベルトにセットした。

「HENSHIN」

システムが起動し、少女はコンパウンドアイが黄色のカブト、ダ
ークカブトに変身した。

そこへ、天道が家から出て来る。

「ほお、カブトか」

天道はそう言うのと手首に装着しているライダープレスを示した。

何？ と二人のカブト。

「俺も混ぜて貰いたいね」

言つて天道はコーカサスのゼクターを召喚し、プレスにセットし
た。

「HENSHIN」

システムが起動し、天道はコーカサスに変身した。

「Change beetle」

と変身完了の音声。

「クロックアップ」

コーカサスはバツクルのトレーススイッチを押した。

「Clock up」

と、音声が届き、二人の前から姿が消え、同時にダークカブトの体が宙に舞う。

「キャストオフ」

とゼクターホーンを展開するカブト。

「Cast off」

アーマーが吹っ飛び、カブトホーンが起き上がり「Change beetle」とライダーフォームへ移行完了の音声が鳴る。

「クロックアップ」

カブトはサイドバツクル叩いた。

「Clock up」

と音声が届き、クロックアップが発動。

「行くぞ」

コーカサスがそう言ってダークカブトをカブトに蹴り飛ばした。

カブトは三つのフルスロットルを素早く順番に押し、ゼクターホーンを倒して「ライダーキック」と元に戻る。

「Rider kick」

音声が鳴ると同時に、カブトは飛んで来たダークカブトに回し蹴りを叩き込んだ。

「Clock over」

と時間の流れが戻り、ダークカブトが吹っ飛んで地面を転がる。

「くっ・・・」

ダークカブトは今にも倒れそうな足取りで立ち上がり、ゼクターホーンを展開する。

「Cast off」

アーマーが吹き飛び、カブトホーンが起き上がる。

「Change beetle」

とライダーフォームへ移行完了の音声。

「怒ったわ」

ダークカブトはそう言うのとサイドバックルを叩いてクロックアップし、コーカサスとカブトを吹っ飛ばし、宙に舞った二人をクナイガンで叩き付けた。

「うわっ！」

「うっ！」

地面に叩き付けられる二人。

（こいつ、強い・・・）

カブトは何とか立ち上がるが、吹っ飛ばされ、地面を転がる。

「クロックアップ」

カブトはサイドバックルを叩いた。

「Clock up」

音声が鳴り、周囲の物体の動きが遅くなる。

カブトは立ち上がり、迫るダークカブトを受け止めた。

「あなた、往生際が悪いわよ？」とダークカブト。

「それが癖なのよ！」

カブトは素早くクナイガンを装備してダークカブト斬り付ける。

攻撃を受けたダークカブトが蹠踉めき、隙を突いてカブトが三つのフルスロットルを押してゼクターホーンを倒し、「ライダーキック」と元の位置に戻す。

「Rider kick」

必殺技発動の音声が鳴り、カブトは回し蹴りを放った。

「Clock over」

時間の流れが元に戻り、ダークカブトは吹っ飛んで地面を転がり、変身が解けた。

そこへ追い打ちを掛けるように、カブトがクナイガンを少女の胸に投げて刺した。

カブトはクナイガンの刺さった少女に近付き訊ねる。

「仲間から聴いてるわ。ライダーシステムを奪ったのは貴方ね？」

「そうよ」

「ベルトは何処にあるの？」

「貴方には教えないわ。けど、私と入れ替わってくれるなら教えても良いけど」

「それは遠慮しとくわ。この歳で未だ死にたくないから。で、盗んだライダーベルトは何処にあるの？」

少女はその問いに口を開いたが、しかし、言葉を発する前に爆裂霧散してしまった。

「その黄金のライダー」

とカブトはコーカサスに向いて言う。

「貴方、手伝いなさい」

「断る」

「ちよつ、未だ何も言っていないでしょ!？」

「お前の言いたい事は大凡見当は付く。ライダーシステムの搜索を手伝え。そんな所だろ」

「・・・良いわ。鯖返して頂戴」

「何？」

「聞こえなかった？鯖返して」

「嫌だね」

「じゃあ手伝って」

「やれやれ。鯖の為だ。仕方ない」

コーカサスはそう言うつと変身を解除。天道に戻った。

それに続き、カブトも変身を解除した。

「さて、何処から探す？」

「そうだな。一番手っ取り早いのは先刻の奴が使っていたゼクターに案内して貰うと言う方法だが・・・」

「その手があったわ」

聡美は傍らに落ちているダークカブトのベルトを拾って装着した。来い　そう念じるが、ダークカブトは現れない。

「現れないわよ？」

「当然だろ。変身すべき資格者はゼクターが決めるんだからな」

「じゃあ何？あのゼクターは人間じゃなくてワームを選んだと？」

「そう言う事になる」

「何よそれ！？」

聡美はダークカブトのベルトを外して地面に投げ付けた。

その時、聡美の携帯が鳴り響いた。

聡美は取り出して応答する。

「はい」

「聡美か。俺だ、雅弘だ。助けてくれないか？」

「どうしたのよ？」

「ワームだ。ワームに囲まれたんだ」

「今どこに居るの？」

「何処かの廃工場だと思うけど、兎に角直ぐに来てくれ！」

雅弘はそう言い残し、電話を切ってしまった。

聡美は家のガレージに駆け込むと、CBR1000RRのエンジンを掛け、ヘルメットを被って跨がり、発進した。

「システム捜しは任せたわ」

聡美は天道にそう言い残し去っていった。

天道は「一寸待て！」と言うが、もう彼女には届かない。

都内の何処かに佇む不気味な廃工場。雅弘はその工場の中でワームに襲われていた。

雅弘は可能な限り逃げ続けたが、ついには逃げ場を失って囲まれてしまった。

（聡美の奴末だかよ！？）

と心中で叫ぶ雅弘の前に彼に擬態した蚊の能力を持つキュレックスワームが現れた。

「お、俺を殺るってのか？」

雅弘は震えた声で擬態雅弘に訊く。

「ああ、お前には消えて貰う」

擬態雅弘が答えると、足音が聞こえてきた。そしてそれは段々と大きくなっていく。

「誰だ!？」

ワームたちが一斉に振り向くと、ジーンズのポケットに手をつ込んで歩いてくる聡美が居た。

「どっちが相楽？」

聡美は立ち止まり、そう訊ねた。

「俺が雅弘だ!」

二人の雅弘が同時にそう叫ぶ。

「判らないわね」

聡美はそう言うつとゼクターを手にして「変身」と、バックルにゼツトする。

「H E N S H I N」

ライダーシステムが起動し、カブトに変身する。

ワームたちは一斉にカブトに襲い掛かった。しかし、カブトのキヤストオフにより飛散したアーマーを喰らい、全員消滅する。

カブトは二人の雅弘を暫し見詰め、サイドバックルを叩いた。

「C l o c k u p」

その瞬間、雅弘の前からカブトの姿が消え、同時に「C l o c k o v e r」と擬態雅弘の背後に現れた。

擬態雅弘は「聡美!」と辺りを見回し、背後にカブトの姿を見付けた。

「どうやら貴方が本物みたいね」

目の前の擬態雅弘を本物と判断したカブトは、雅弘の方を向いて近付き攻撃した。

雅弘はひらりと身をかわして反撃する。

その傍らで、擬態雅弘が北叟笑む。

（そうだ。そうやって人間を殺すんだ。そうすればお前は資格を失う。そしてこの俺に殺されるんだ）

擬態雅弘がそう思うと、カブトが攻撃を止めて振り向いた。

「何を思ってるかは知らないけど、私の目は誤魔化せないわよ」
「何？」

「あんた先刻、私が変わる前に一瞬、擬態を解いたでしょ？」

「待て、何を言ってるんだ。俺は本物だぞ？」

「否、偽物よ。あんたは先刻、クロックアップして擬態を解き、左腕の棘で相楽の体内にウィルスを注入し操り人形にした。全く、姑息な事してくれるじゃない」

「まさか貴様！？」

「そう、そのまさかよ」

「こ、この裏切り者め！」

擬態雅弘はキュレックスワームに変貌してカブトに襲い掛かった。カブトはひらりと身をかわして蹴り飛ばした。地面を転がるキュレックスワーム。

「ふっ」

「何が可笑しいのよ？」

「お前、女を殺しただろ。先刻」

「・・・・・・」

「そいつ、人間だぞ」

その言葉にフルスロットルを押そうとしたカブトは「何ですって！？」と感嘆の声を上げた。

「板橋 文香。そいつの名だ」

「文香！？」

「ああ、そうだ」

「そんなバカな！だって文香はこの前ワームに殺されて・・・！」
「違う。あれはアラクネアワーム・フラバスの手下が擬態したものだ。本物の文香は俺がウィルスを注入して操り、ダークカブトの力を授けてライダーシステムを集めさせていた。そして、お前を取りに行き、そこでお前に殺された。その証拠に奴はワームにならなかっただろ？」

その言葉にカブトは拳を強く握り締めた。

「・・・さない」

「ああ？」

「人を殺して擬態するだけでなく、人を操ってその人を別の人に殺させるなんて、絶対に赦さないわ！」

言ってカブトはフルスロットルを押し、ゼクターホーンを倒し、「ライダーキック」と元に戻してキュレックスワームに近付く。

「お前も殺して擬態したんだろうが」

「違う！」と回し蹴りを放つカブト。

「私は殺してなんかいない！」

「じゃ、じゃあ何故、擬態した？」

「殺されたのよ。目の前で別のワームに。当初、聡美は私が殺して擬態する予定だった。でも、そうする前に私は、蠍のライダーと対峙して殺され掛けた。そこにあの娘が来て、カブトに変身して私を助けてくれたのよ。以来、私は彼女を恩人として慕う様になった。そしていつか恩を返そうと思っていた矢先、殺された。だから私は聡美に擬態し、聡美の意志を継いだ。それがあの時、私があの娘に出来る恩返しだったから」

「情が移ったと言う訳か。最低な野郎だ。我々の本来の目的を無視して人間の味方に付くとはな」

「最低なのはそっちよ！」

とカブトクナイガンを手にして斬り付けるカブト。

「お前は、お前だけは絶対に赦さないわ！」

カブトはクナイガンを大きく振り被り、勢いよくキュレックスワームの胸に刃を突き刺し、すぐに引っこ抜いた。

「この程度で死なれちゃ困るわ！あんたにはもっと苦痛を味わって貰わなきゃ私の気がすまない！」

と今度はクナイフレームを取り出してクナイカッターを収め、アランチブレイクを放つ。

「未だよ！未だ足りないわ！」

クナイガンを持ち変え、アバランチシュートを放つ。

「トドメ！」

カブトはフルスロットルを押し、ゼクターホーンを倒してパワーをチャージし、元に戻して「Rider kick」とキュレックスワームを宙に蹴り上げ、連続キックを繰り返して、最後に跳び上がって回し蹴りを放った。

その瞬間、キュレックスワームは大爆発を起こした。同時に、操りの効果が切れた雅弘が「うわっ」と爆風によって吹き飛ばされる。カブトはサイドバックルを叩き、クロックアップして雅弘を抱えると廃工場から脱出した。

「Clock over」

時間の流れが戻り、廃工場は跡形もなく吹っ飛んだ。

「あれ、生きてる？」と雅弘。

カブトは雅弘を降ろして変身を解いた。

「て言うか俺、今まで何してた？ 聡美が来てくれた所までは覚えてんだけど、その先は・・・」

「相楽、世の中には知らない方が良い事もあるのよ」

「はあ？」

疑問の表情をする雅弘。

「それよりさ、ライダーシステムの事聞いてない？」

「お前、自分で奪って俺ん家に隠したの、もう忘れたのか？」

「否、それ私じゃないから」

「え、まさか？」

「そう、そのまさか」

「じゃあ今朝、俺と登校したのもワームか！？」

「登校ってあんた、今日は土曜日よ。まさか補習で？」

その問いに雅弘は「五月蠅え！」と答えて走り去っていった。

「あ、一寸待ちなさい！」

聡美は愛車のエンジンを掛け、ヘルメットを被って発進。後を追いつけた。

やがて聡美は追い付き、前に回り込んで行く手を阻んだ。

「メットもう一個あるから乗りなよ」

言って聡美はヘルメットをもう一つ取り出して雅弘に渡した。

雅弘はヘルメットを被り、聡美の後ろに跨がった。

「しっかり掴まっててよ」

聡美がそう言つと、雅弘が腕を回してきた。

むにゅっ！　と音がし、聡美は頬を赤らめる。

「一寸あんた、何処触ってんのよ!?」

「何処つて、胸だけど」

「殴るわよ?」

「何で!?」

聡美は「はあ」と溜め息を吐いて肩を竦めた。

「あんたには羞恥心つてのが無いの?」

「そんなの無え!」

「威張つて言つな!降りろ!」

「嫌だ」

「そう、じゃあ覚えておくのね」

「一寸待て、降りる」

雅弘はそう言つて降り・・・ようとしたが、発進されて降りそびれてしまった。

「ちよっ、降りる言つたろ!?」

「決定事項よ。取り消しは出来ないから、覚悟しておくのね」

「マジかよ・・・」

「着くまでたつぷり堪能しておくのよ?その分、倍にしてあげるから」

「それは嫌だ!と言うか、暴力は止せ!」

「違うわ。スキンシップよ」

「お前な、あれはただの暴力としか言わねえよ」

「暴力ねえ・・・。私、暴力は嫌いだわ」

「じゃあ殴るなよ」

「だーから、スキンシップって言ってるでしょうが!」

「お前のスキンシップは暴力なんだよ」

「・・・・・・・・」

聡美は無言を回答に運転に集中した。

「無視すんなよ!？」

「五月蠅いわね。今、運転してるから話し掛けないで」

聡美の言葉に、雅弘は言葉を失った。

その後、自宅に着いた雅弘は、聡美にフルボッコにされたと言う。

（後書き）

アドオンを入れた為、Firefoxがルビタグに対応する様になった。これでルビの表示が確認出来る様になった訳だ。と言うのは置いて、今回はドレイク（風間 大介）が出ます。多分。前作のURLは下記に記載。携帯は案内ページから願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0484e/>

仮面ライダーカブト 其の弐

2010年10月8日14時10分発行